

www.jwing.net
mail@jwing.net



シンガポールTravelRevive特集

SINGAPORE imagine



ビジネストラック渡航から見たシンガポール現地のコロナ対策

MICEイベント運営、ホテルと観光地での徹底防疫

9月18日から日本とシンガポール間のビジネストラックの運用が開始された。段階的ではあるが、これにより相互の往来が再開され、ビジネスや観光の回復への一歩につながることが期待されている。今回、11月25日から2日間、シンガポールで開催されたMICEのトレードショー TravelReviveにビジネストラックで参加し、日本出国からシンガポール入国、現地滞在と再び日本に戻るまでを体験。現地での感染対策やビジネストラックでの訪星における注意点を紹介する。(取材・写真:嶺井政敏/平山喜代江、取材協力:シンガポール政府観光局)



シンガポールの街並み

主要施設における新型コロナ感染防止対策

<ホテル>

●アンダーズ シンガポール

ブギス地区にあるハイアット系列の5つ星ホテル。複合施設デュー・ギャレリア上層階にあり、モダンな342室の部屋はアンドレ・フー氏がインテリアデザインを担当したもの。検査後空港から直行し、入口では検温と健康状態の申告をQRコードで非接触で行う。チェックイン後は結果が出るまでは待機用の部屋で過ごす。部屋内にディレクトリは設置されていないのでルームサービスはfacebookのメッセージで受付。結果が出るまでは食事の受け渡しをドアで行い、スタッフは部屋の中には入らない。結果が出たらメールでホテルに知らせ、陰性なら通常の部屋へ移動することができる。



空港で実施したPCR検査の結果判明までは、専用の客室にて待機が求められる

<観光>

今回トレードショーの前後に訪れたのは、コロナ禍における安全基準に沿ってカスタマイズされたプライベートツアー。シンガポール政府観光局(STB)によれば、今後のレジャー市場にも活用できるプロダクトとしている。

●シンガポール動物園とリバーサファリ

1973年開園のシンガポール動物園は、檻を使わず自然に近い環境で飼われている。動物のありのままの姿が見られる行動展示の先駆けで、特にオランウータンが自然のまま過ごしているエリアが知られる。隣接するリバーサファリは、世界の8大河をテーマに珍しい淡水魚など川に棲む生物の生態が間近に見られる。四川省の気候に合わせて温度調整されたパンダ舎も人気。両施設ともにワイルドライフ・リザーブス・シンガポールによる経営で種の保存・環境保護などが学べ、修学旅行に組み込まれることも多い。

7月に営業再開し、事前のオンライン予約でのみ入場が可能。収容人数を通常の50%に

し、入口出口をそれぞれ1カ所に制限しているほか、密にならないよう入口での人数も計測している。地図も紙の配布はせずにQRで読む。象の餌付け体験なども事前予約制で、密になるイベントは中止している。



シンガポール動物園の入場はオンライン予約となっている

●ナイトサファリ

「イブニング・イン・ザ・ワイルド」

さまざまな動物の夜の姿を見られる世界初の夜間動物園。8つのゾーンにはゾウやライオン、カバ、クマなどの見慣れた動物たちの普段みられない夜の姿が楽しめる。現在ビュッフェは休止中で、トラムは1列開けて座る。敷地内には40人収容のテントがあり、MICE用のユニークメニューにも利用できる。テントを利用した特別プログラムが、夜の動物や貯水池の景色を眺めるトラムライドと、豪華なテントでの4コースディナーを組み合わせたイブニング・イン・ザ・ワイルド。フクロウやヘビなどの動物も登場し、軽快な解説とともに、間近に動物が見られる時間もある。最後はナイトショーもあり、シンガポールでワイルドライフが楽しめる特別な体験となる。



ナイトサファリ内の「イブニング・イン・ザ・ワイルド」

●シーニックケーブルカーライド&ディナー

標高106mのマウント・フェーバーとセントーサ島を結ぶケーブルカーからシンガポールの夕景を堪能できる。海側からのシンガポール本島の景色や真上からセントーサ島の姿が楽しめるほか、鬱蒼とした緑が多いこともわかり、シンガポールが俯瞰できる。

通常キャビンは8人乗りだが、現在は5人までに制限。キャビン内での食事だけでなく、マウント・フェーバーの上にあるARBORA レストランも食事のオプション。ここでは、セントーサとハーバーフロント周辺が見渡せる眺めの良さで地元の人に人気のスポットで、ウェディングなどに利用されるベニューでもある。

●ナショナル・ギャラリー・シンガポール プライベートツアーとディナー

シティホールと旧最高裁判所の2つの歴史的建築物を改装し、2015年に開館した美術館で、19世紀から現代まで、約9000点ある東南アジアの近代美術コレクションからシンガポールが辿った歴史が学べる。ルーフトップにあるバー、Smoke & Mirrorsはマリナーベイサンズ(MBS)方面を見渡せる絶景スポット。中華からイタリアンまで10軒以上のレストランやカフェも併設し、美術館鑑賞後に食事をする選択肢が豊富。

館内ではパブリックエリアに距離確保の印があるほか、展示室ごとに収容可能な人数が表示され、監視員がチェックしている。ボランティアガイドによるプライベートツアーの参加人数は20人だったが、現在は5人まで。

<レストラン>

フェーズ2の11月現在、レストランは5人まで同席が可能。食事中はマスクを外してよいが、店によっては外したマスクを入れる袋が用意されている。ミシュラン1つ星のレイ・ガーデンでは距離をとるようテーブルにシートが置かれていた。Mott32やジャスティン フレーバー オブ アジアなどの有名店もMBSのコンベンションエリアから徒歩で行けるが、店の入口では検温、QRコードでのチェックイン・アウトが必要。キャッシュレス支払いのほか、メニューのQRコード化も進んでいる。



ケーブルカーライド乗車前は手のひらを掲げて体温チェックが行われていた



ナショナル・ギャラリーの展示エリアは最大入場可能人数が指定されている



レストランでは使用可能エリアが制限されている

シンガポールの感染対策とSGクリーン認証

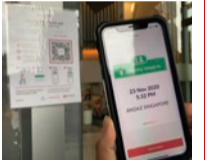
東京23区の広さに約570万人が住むシンガポールは市中感染の押さえ込みに成功している国のひとつ。11月の新規感染者数は1ヶ台もしくはゼロで推移、12月13日時点の累計死者数は29人(同日の東京都は535人)。4月に発生した外国人作業員クラスターを逐一検査と隔離で拡大を防ぎ、3月には「トレストックゲザー」というデジタル追跡ツールや端末の提供を開始し、4月にはマスクの着用を義務化。6月2日には4月に始まった経済活動自粛が解除され、追跡アプリと端末の携帯、マスク着用や対人距離の確保をしたうえで段階的な経済活動を再開。12月28日より最終段階のフェーズ3に入り、1テーブルに同席できる人数が5人から8人に、人数のキャパシティが10平方メートルに1人から8平方メートルに1人に、そして観光地での入場を50%から65%まで増やすなど、各種規定が緩和される予定だ。

旅行業関連では、コロナが世界中で拡大が始まり出してから2月にSGクリーン認証制度を開始。さらにGDPの約1%、38億シンガポールドル(2019年)を担うMICEにおいては、8月に50人参加のイベントから段階的に再開し、10月には参加人数を250人に拡大した。

全ての公共施設に入る前には検温とQRコードでのチェックイン・アウトの操作が必要のため、スマートフォンの携帯は必須だ。公共の場では対人間隔をあけるように各所で印が付けられているほか、巡回するセーフディスタンスアンパサダーが密になると声をかける。

◎SGクリーン認証

商業施設、飲食、宿泊、観光施設、展示会場や運営会社を対象に、国が2月に定めたコロナウイルス感染防止のための衛生基準を満たした施設に与えられる認証制度。利用者や従業員の健康と安全を守るためのルールや基準が示され、感染防止のための掃除や衛生管理をしていることを認証する。11月の時点で2万7000カ所が認証を得ているという。



施設の入退場時にはQRコードを読み込むことが求められる。外国人訪問者はパスポート番号と連絡先を報告する



主要の観光施設や商業施設、公共施設には「セーフディスタンスアンパサダー」が巡回する



政府が定めた衛生基準をクリアした施設で表示されている「SGクリーンマーク」

コロナ期のシンガポールの現状と今後の観光復活への見通しをどう見るか

JTBアジア・パシフィック、生田亨社長と田代尚義シンガポール支店長に聞く

新型コロナウイルスの感染拡大により、シンガポールの観光産業にも大きな影響をもたらした。シンガポールの感染拡大対策や観光を取り巻く現状。今後の日本からの旅行需要回復の見通しについてどのように見ているのか。シンガポールに在住するJTBアジア・パシフィックの生田亨社長と田代尚義シンガポール支店長に話を聞いた。

新型コロナウイルス流行拡大前の旅行需要の動きについて

生田: 昨年は日本人の海外渡航者数が初めて2000万人の大台を突破した。この良い流れを受けて、今年に入っても入国規制が行われる3月までは昨年を上回る勢いで好調に推移していた。ただ、新型コロナウイルスの流行拡大にあわせて、その流れが一気にストップしてしまった格好だ。

2月の段階では5月あたりに感染の流行が収まり、その後少しずつ回復し、9月ごろには需要が回復すると見ていた。ただ、シンガポール政府が頻りに発表する新型コロナウイルスの感染防止に向けた政策や今後の見通しなどを見ると少なくとも来年の夏あたりまではなかなか難しい状況が続くのではないかと感じている。

コロナ禍において、どのような取り組みを行っているのか

田代: 現在は一般消費者向けのオンラインツアーや日本の学校向けにオンライン教育旅行の提案を行っている。

オンライン教育旅行に関してはコロナ禍においてコンテンツの拡充に取り組んでいる。特に人気が高いのが地元学生のオンライン交流や企業訪問、シンガポールの工科大学

でロボット工学を学ぶことができる素材などに人気を集めている。現在、日本の学校からの問い合わせも多く、すでに来年3月までに15校ほどの予約が確定している。

オンラインの場合は費用面でのメリットが大きいほか、学校のクラス単位など小規模のグループ向けにさまざまな素材を提供できる点も大きい。そうしたことから、これまで予算の関係でシンガポールの教育旅行を断念していた学校からの関心も高まってきた。

将来シンガポールへの渡航が可能となったときには、リアルでシンガポールを訪問してもらうとともに現地ではオンラインを組み合わせてさまざまな体験ができるよう「ハイブリッド型」のコンテンツも用意できればと思っている。

生田: シンガポール政府観光局(STB)と連携して実施したオンラインツアーも軒並み満員となるなど好調な実績を挙げている。今後は、より臨場感を伝えることができるコンテンツを充実させていくなど、より良いものを作っていく。

シンガポールの安心・安全対策についてどのように見ているのか

生田: シンガポールの取り組みは安全・安心を可視化するという観点では非常に進んでい

ると思っている。QRコードを使った行動確認や新たなアプリの開発。そして食事人数の規制やソーシャルディスタンスについても非常に細かく、かつ厳しい取り組みが実施されていると感じている。こうした安全・安心対策については、今後シンガポール旅行を提案する上での一つの売りになると感じている。

MICEの復活に向けて「TravelRevive」が開催された

生田: TravelReviveの開催に加え、マリナーベイ・サンズには最先端のハイブリッドミーティングシステムが設置構築されるなど、シンガポールは政府を挙げてMICEの復活に非常に力を注いでいる点を強く感じている。今後は安全・安心を担保しながらミーティングを実施していくためにさまざまな検討が行われているということも聞いており、非常に期待している。

今後のシンガポールへの外国人旅行復活への見通しや旅行再開に向けた準備について

生田: シンガポールと香港が実施しようとしている「エア・トラベル・バブル」の動きが1つのターニングポイントになるのではないかと考えている。香港の新型コロナウイルス感染拡大の影響で11月下旬からのスタートが延期となってしまったのは残念だが、この流れが他国に広がることでシンガポールの国際観光が復活するという流れになるのではないかと見ている。

田代: われわれとしては、いつレジャー旅行が再開してもいいようにスタンバイしている。



JTBアジア・パシフィックの生田亨社長(写真右)と田代尚義シンガポール支店長

ツアーで使用するバスには現地の医療機関で使用している消毒スプレーを取り寄せて消毒を行う体制を整えている。また、日本から抗菌作用があるおしぼりも大量に仕入れているなど、着実に準備を進めている。また、安心・安全を訴求していく上で最も重要視しているのが、STBが展開している認証制度「SGクリーン」だ。この認証はシンガポールの旅行に参加してもらう人にとって一番わかりやすい安心・安全対策であり、指標であると思っている。

今後ツアー造成を行っていく上ではSGクリーンの認証を取得している施設を使用することが大前提となるとともに、われわれと取引がある施設で認証を取得していないところについては認証を取得するよう求めていくことにしている。

TravelReviveにおけるシンガポールの感染症対策マネジメント

TravelReviveはアジア太平洋でコロナ禍初となるリアルなトラベルトレードショー。今後のMICE拡大に向けた試験的なイベントとしてITBアジアと共催で、政府主導で開催された。2日間の参加人数は約1000人、海外14カ国からの参加者もいたため、各国間とのビジネススキームに基づく入国から出国までの手続きを踏んだ上で、入国時のPCR検査と追跡端末の携帯だけでなく、開催期間中は連日簡易検査実施とMICEポッドという会議専用の追跡端末の携帯、事前に決められた日程遵守の行動制限とコホート(群)ごとの行動、会場のゾーニング(コホート化)を行った。

MICEイベント再開にあたり、シンガポール政府観光局(STB)は7月に安全対策とリスク管理の指針「セーフビジネスイベント(SBE)フレームワーク」を策定。このSBEをもとにとりまとめた具体策が、MICE開催のガイドライン「安全マネジメント対策(SMMs)」で、SMMsが求める5つの対策が、(1)ゾーン内は50人以下、ゾーン内コホートは20人以下、コホート内の各グループは5人以下、(2)1m以上の対人距離確保、(3)コホートやゾーンが混ざらないよう仕切る、(4)10平方メートルにつき1人のスペース確保、(5)主催者は開催後に報告書を提出、というもの。策定はシンガポール保健省の指導に基づく。

イベント全参加者に新型コロナウイルス検査を実施 カンファレンス・商談エリアともに徹底して参加人数を管理

会場はマリナベイ・サンズ(MBS)のサンズ・エキスポ&コンベンション・センター。入場したらまず参加者は会議開始前に簡易の新型コロナウイルス検査であるART検査(抗原迅速検査)を受ける。検査エリアから結果を待つ待機エリアまで、待機部屋の中もゾーン分けがされており、ゾーン内は同じコホートの人しか入れない。待機中はトイレに行くのも不可。各グループに帯同したシンガポール在住のガイドも海外参加者に同行するため、

毎日検査を受ける。30分で結果が出るので、陰性ならそのまま会議に参加など決められた日程通りに動く。陽性の場合PCR検査を受ける。

会議場や展示会場入口では参加者の体温や人数が規定を超えないように計測するだけでなく、マスクの有無もチェックされ、異常があれば主催者に通知がいくようAIで管理。登録受付も事前に送られたQRコードをスキャンするだけで、自分のスマホ以外への接触は

ない(バッジは受け取る)。講演会場も40人ごとのゾーンに仕切られ、ひとつの丸テーブルに座る人数も5人までに制限された。

36社による79のブースが並んだ商談会場も2つのエリアに分けられた。事前にアポイントを取った商談は、アクリル板で仕切られたミーティングポッド内で行う。混み入った話ができるように箱型ブースになっているが、飛沫の濃度が薄まるよう、天井がない。

また、アポイントなしで話ができるエリアは、1つのコホートの人やグループが入っているときには別のコホートは入れず、待機となる。ブースはオープンな作りだが同じく天

井がない。コの字型のアクリル板越しに会話ができるようマイクとスピーカーも取り付けられている。出展者が同じ組織・企業から複数参加していても、アポイント用商談ブースとフリーゾーンで人員の入れ替えは不可。販促物等紙類は一切置かず、QRコードで読み込む。名刺の受け渡しもなし。食事は商談会場に設置されたカフェテリアか、隣接するMBSショッピングモール内のレストランで。コホートが変わるようなテーブルやディナーパーティなどは行われなかった。



イベントの全参加者にART検査の受検が求められる



入場可能人数とエリア内の滞留人数を徹底的に管理する



商談会場フリーゾーンに設置されたブースにはアクリル板とマイク・スピーカーが設置されている



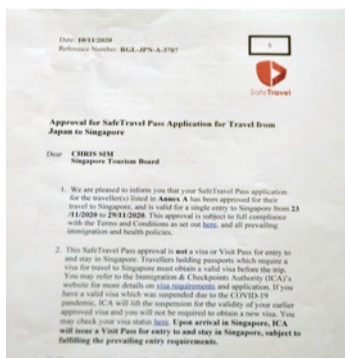
アポイント商談は特設のミーティングポッド内で行う

ビジネストラックを使った日本とシンガポール間渡航における手続きと流れ

ビジネストラックは、両国間の短期業務渡航に関する特例措置で、活動計画書の提出等により、両国入国後の14日間自宅待機期間中も行動範囲を限定した形でビジネス活動ができるスキーム。滞在期間は30日以内。シンガポールではReciprocal Green Lanes (RGLs) という。日本での感染拡大を受け、11月22日23時59分から過去14日間に日本の渡航歴があるシンガポールへの渡航者は指定施設での14日間の隔離となったが、対象はビジネストラックを利用するシンガポール拠点の帰国渡航者で、日本を拠点とする渡航者がビジネストラックで入国する場合隔離の必要はない。12月10日現在、シンガポール、韓国、ベトナム、中国の4カ国で運用されている。

日本出国前

- 1 シンガポールの受け入れ企業または政府機関が代理でシンガポールの「Safe Travel Pass承認書」を受領。
- 2 シンガポールの受け入れ企業または政府機関がSafe Travelのサイトに渡航後14日間の「行動計画(Controlled Itinerary)」を登録。
- 3 Safe Travelのサイトからシンガポール到着時のPCR検査の事前登録と支払い、QRコード受領。
- 4 「誓約書」「本邦活動計画書」を日本の外務省のサイトからダウンロードし記入(帰国時に提出)。
※日本人は査証申請不要。渡航前14日間は日本に滞在していること。



シンガポール入国時に必要な「Safe Travel Pass承認書」

6 「検査証明」のPDFデータをシンガポールの受け入れ企業または政府機関に送り、Safe Travel Passのサイトに入れてもらう。

7 「シンガポール電子出入国カード(SG Arrival Card)」のサイトあるいはアプリに入国情報と健康状態に関する申告をオンラインで提出。
→うまく送れない場合は別のメールアドレスを利用する。「SG Arrival Card」は空港チェックイン時に提示するためプリントアウトしておく。



成田空港PCRセンターは2時間で陰性証明書の発行が可能。第1ターミナル、第2ターミナルに設置されている(写真は第1ターミナル)

日本出国当日

- 8 チェックインカウンターで「Safe Travel Pass承認書」「検査証明」「Eチケット」などの書類を提示し、チェックイン。
- 9 シンガポール航空では搭乗前にマスク、ハンドサニタイザー、除菌ティッシュの入ったケアキットを配布、機内ではマスクを着用する。



シンガポール・チャンギ国際空港に設置されているPCR検査場。入国審査・税関通過後、センターに向かう導線が構築されている

ングレコメズで受け取る。あるいはTrace Togetherアプリをインストール・起動。

13 手配された車でホテルに向かい、チェックイン。

14 検査結果待ち用の部屋(個室)で待機。食事はルームサービスのみのみ。

15 結果が出たら、ガイドとホテルに連絡。陰性であれば待機部屋から滞在用の部屋へ移れるが、レストランやプールなど公共エリアへの出入りは不可。食事もルームサービスを頼む。

16 行動計画を遵守して活動する。公共交通の利用は不可。

シンガポール出国前72時間以内

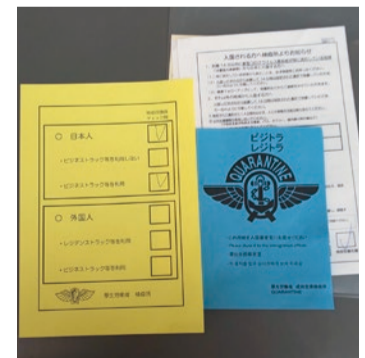
- 17 PCR検査を受け、「検査証明」を取得

する。検査時に「Safe Travel Pass承認書」の提示、「Safe Travel Concierge」への登録が必要。結果はメールで送られてくるので、日本の空港検疫所に提出する場合はプリントアウトしておく。

日本帰国時

18 機内で配られた「質問票」と「誓約書」「本邦活動計画書」「検査証明」の各写しを空港検疫所に提出。なお、10月30日からシンガポールは感染症危険情報レベル2(不要不急の渡航は止めてください)に引き下げられ、行動制限の緩和を制限しない場合も抗原検査の必要はない。

19 接触確認アプリCOCOAの導入やGoogleマップの位置情報などの設定をし、14日間は「本邦活動計画書」に基づき活動は公共交通を使わずに自宅と勤務先の往復に限定、健康フォローアップも行う。



検疫所での審査終了後に書類確認が済んだことを証明する用紙が配布される(成田空港の場合)

日本出国前72時間以内

- 5 “新型コロナウイルス検査証明機関登録簿”に記載の機関でPCR検査を受け、英語の「検査証明」を取得する。
→検査は出発時間の72時間以内に行う。フライト遅延も踏まえ、検査時間には余裕を持っておく。当日に証明を出せる機関は都内でも限られ、出発前日に日曜祝日の休診日がかかると証明発行が遅くなるので注意。なお、成田空港のPCRセンターでは2時間で証明書が発行可能になった。

シンガポール到着

- 10 到着時には搭乗券確認、検温を経て「SG Arrival Card」のバーコードを提示。入国審査ではパスポートのほか、「Safe Travel Pass承認書」「検査証明」「Eチケット」を提示、グリーンシールが貼られる。
- 11 荷物受け取り後、事前に申し込んだPCR検査のQRコードを提示、検査を受ける。ターミナル3は出口外に検査場が設置。
- 12 手配されたガイドと会い、携帯型の「Trace Together」トークンを空港内チャ

ビジネストラック利用者の国籍やビザ等の種類、滞在が14日以上の場合などは手続き内容が変わる。また、新型コロナウイルスをめぐる各国の対応策は流動的なので、最新の情報や詳細はシンガポールのSafe Travelのサイト、外務省などのサイトを参照。

外務省のシンガポール・ビジネストラック説明サイト

https://www.mofa.go.jp/mofaj/a_o/na/page22_003415.html

シンガポール政府によるビジネストラック説明サイト

<https://safetravel.ica.gov.sg/rgl/requirements-and-process>

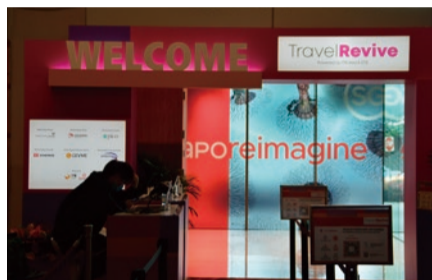
シンガポールで「TravelRevive2020」開催 Withコロナ期の観光のあり方を世界に発信

シンガポール政府観光局(STB)と旅行見本市「ITBアジア」を運営するメッセベルリンが共同で主催した旅行業界のB2Bイベント「TravelRevive2020(トラベルリバイブ2020)」が、11月25日~26日にかけてシンガポールのサンズ・コンベンションセンターで開催された。

今回のイベントはオンライン参加に加え、日本を含めた14カ国から旅行業界やメディア関係者65人がシンガポールに到着し、商談会やカンファレンスに参加するハイブリッド型のイベントとした。

新型コロナウイルスの感染拡大以降、シンガポールで海外から参加者を招いた国際イベントを実施するのはトラベルリバイブが初めてとなった。開催期間中にはシンガポール国外からの参加者を含め約1000人がリアルイベントに参加した。コロナ禍で世界中の観光市場が急激な落ち込みを見せる中で、厳重な感染対策を講じて商談会を実施するとともに、デジタル技術を組み合わせた新たなツーリズムやMICE実施のあり方を提案。イベントを通じてWithコロナ期における世界中の観光マーケット「復活」への道筋をシンガポールから発信した。

世界14カ国から入国した65人を含め約1000人がリアル参加



Withコロナ期のMICEイベントのあり方を国内外に発信した「TravelRevive2020」

トラベルリバイブ2020は外国からの渡航者を安全・安心な旅程で受け入れる方策や感染症防止対策を講じた上で、実際に人を集めてMICEイベントの運営手法などを実際に試行していくことで、国際間のレジャー旅行やMICE再開につなげていくことを目指し企画されたもの。

Withコロナ・ポストコロナ期での新たなツーリズムやMICEのあり方を議論するカンファレンスと例年この時期に開催されるITBアジアを組み合わせたB2Bイベントとした。

チャン貿易産業相「シンガポールが国際観光復活の先駆者に」 感染症リスク「排除でなくマネジメントしていく」

トラベルリバイブ2020の先陣を切ってシンガポールのチャン・チュンシン貿易産業大臣がスピーチを行った。

チャン貿易産業相は「新型コロナウイルス(COVID-19)でツーリズムを取り巻く環境は一変してしまった。ただ、シンガポールはワクチンの開発やCOVID-19の終息を待つ

ことなく、旅行ビジネスを再構築していく」と強調した。

その上で「われわれは感染症のリスクを排除するのではなく、マネジメントしていく方向で動いていく」という考えを示した。加えて「シンガポールは海外からの訪問者を受け入れるうえで健康と安全の保障を迅速かつ最

善の形で実施するためのオペレーションにおいて先行している。こうした環境を踏まえて、シンガポールは安心して革新的な旅行の新たなスタンダードを実現する先駆者となる。そのためにMICEや旅行業が安全に復活できるよう力を尽くす」と述べた。

さらに「新たなスタンダードを作ることでさまざまな国から人が集まることができるミーティングプレイス、ビジネスハブとしての位置を強固なものにしていく」と述べ、観光による国際交流復活に向けて率先して新たな道筋づくりを目指していく意向を示した。



イベントのオープニングスピーチを行った、シンガポール政府のチャン・チュンシン貿易産業大臣

世界の旅行体験やMICE再興へ、業界リーダーたちが議論 健康証明の標準化、リアルとオンライン平準化課題

25日にはチャン貿易産業相のスピーチに続き、「リーダーズパネルセッション」が開催された。同セッションはパネルディスカッションの形式で観光、MICE、それぞれの領域において議論が行われた。

前半はアクセンチュア、グーグル、アマデウス、トラベルポートの4社の幹部がパネリストとして参加し、「テクノロジーが旅行市場の回復にいかに関わっていくのか」をテーマに議論が行われた。

ディスカッションでは、国際観光の再開においては陰性証明・健康証明のボーダーレス

化やデジタル化が実現することを期待したいといった意見があったほか、国ごとに異なる状況や感染者の増減により日々変わる状況に対応するためには情報技術の存在が不可欠といった意見が寄せられた。

ただ、デジタル対応を進めていく中で、どのようにセキュリティを確保し、安全に技術を利用していかか今後の課題になってくるといったデジタル化による安全性への指摘があった。

セッション後半は国際的な展示会の業界団体関係者やMICEのオーガナイザー、イベント企画会社の幹部がパネリストとなり、コロナ禍におけるMICE運営の今後の方向性をテーマに議論が行われた。パネリストからはオンラインでのイベント実施となったことで、これまでにはなかった新たな需要の広がりも見られた。

また、これまで関わりが少なかった業界団体との新たな協力体制が構築される動きも見られた一方で、リアルとオンラインのバランスをいかに平準化させていかに効果的なMICEイベントを実現させることができるのかというのが今後の課題になるという指摘もあった。



グーグルやアマデウスなど旅行とテクノロジーの融合を牽引する企業トップが今後の旅行市場回復への道筋について議論



シンガポール政府観光局のアンドリュー・プア氏

シンガポールが描くポストコロナ期のMICEとは STB、アンドリュー・プア MICE担当エグゼクティブ・ディレクターに聞く

シンガポール政府観光局(STB)はTravel Revive2020の開催を通じて、MICEイベント実施におけるさまざまなパイロットモデルについて国内外に発信した。今回のイベント開催の意義やポストコロナ期におけるMICEの方向性についてどのように考えているのか。STBでMICE部門のエグゼクティブ・ディレクターを務めるアンドリュー・プア氏に聞いた。

認証を受けたホテルに安全にチェックインする。そして安全な旅程をつくっていくことに取り組んでいる。

TravelRevive実施において提案したかったことは何か

今回のイベントでは3つの取り組みを軸に取り組んだ。まずは、安全なビジネスイベントの実施に向けた取り組みだ。すべての参加者が健康で安全であることを保証することをプライオリティとして、安全マネジメント対策を講じるとともに、旅行の流れを手順化した。その1つが全参加者を対象としたART検査(抗原検査)だ。この検査は100%正確とはいえないが、イベントに参加する前に健康を証明するのには十分であると考えている。ただ、もっと迅速かつ正確な検査を実現することができれば、より多くの人々がMICEイベントに参加することができるだろう。

2つ目はデジタル技術の活用だ。イベント参加者全員に携帯してもらった追跡端末であるMICEポッドの活用により、参加者の動きを把握できるようにし、安全に関するマネジメント対策を講じることができた。また、リアルとオンラインを組み合わせたイベントを実現させるため、ハイブリッド・スタジオを

使った会議など最新技術を駆使した取り組みも行った。

3つ目は、イベント期間中に安全にシンガポールの魅力を体験することができる観光施設の視察だ。小グループで安全に催行することができるツアーをカスタマイズすることで、さまざまな体験を提供することに取り組んだ。これが上手く行けばレジャートラベルの再開にも第一歩を踏み出すことができる。

このタイミングでイベントを実施した意義とは

シンガポールはこれまでMICEデスティネーションとしてアジア太平洋地域でリードしてきた。COVID-19の流行後はバーチャルによるイベントを実施してきた。しかし、トレードショーは関係性や友好関係を構築するためにはフェイス-toフェイスのやり取りを欠かすことができない。そうした中でわれわれはMICEイベントにおけるフェイス-toフェイスの出会いややり取りを取り戻すためにバーチャルから、リアルを融合させたハイブリッド型のイベントを実現する。これからはイベントの大きさや規模ではなく、質が求められる。安全面への配慮やオンライン参加者にも有益なイベント作りが求められる。

MICEイベント運営における今後の課題について

今後はハイブリッド型の運営に移行していくことになるのだが、これを実現するのは簡単なことではない。イベント運営に求められるスキルや能力が異なるからだ。今後はハイブリッドイベントに対応するための技術取得に向けた訓練制度の構築などにも取り組んで行くことにしている。

レジャートラベル再開の見通しについてはどのように考えているか

日本とはビジネストラックが構築され、ビジネストラベルは再開した。今回のTravelReviveでは、現在の状況を踏まえた新しい形態の現地視察プログラムを実施し、安全な旅程を作り上げて行くための提案を行った。これはレジャートラベルにも応用できると考えている。今回のMICEイベントを通じてまずは安全な観光実現への道筋を作り、いち早く日本からレジャーの旅行者を受け入れることができるようになれば光栄であると思っている。

国際観光復活へ新プラットフォーム「SingapoReimagine」立ち上げ

シンガポール政府観光局(STB)は新型コロナウイルスで大幅に落ち込んだ国際観光の復活に向けた新たなプラットフォーム「SingapoReimagine(シンガポーリマジン)」を立ち上げ、世界中の旅行を再構築するための議論をするためのフォーラムを開催する。これと同時に宿泊施設や交通機関、観光施設などとともに感染症対策を始めとした安全・安心な観光を実現するための観光素材の開発や最新テクノロジーを組み合わせた新たな観光のあり方を模索。コロナ後の新たな観光の姿をシンガポールから再構築していくことを目指す。2021年から具体的な取り組みに着手するが、詳細については後日改めて発表するとしている。

世界中の観光関係者が議論するフォーラム設置 初回はシンガポールで開催、その後世界各地へ

SingapoReimagineは、世界中の旅行を再構築する方法について世界中の観光関係者が議論を行うフォーラム「Reimagine Travel-Global Conversations」の取り組みと、シンガポール国内でポストコロナ期に向

けた新たな観光コンテンツを構築していく「Reimagine Travel in Singapore」の二本立てで展開していく。

フォーラムに関しては世界中の旅行を再構築する方法についての議論を深めていくこと

を目的として立ち上げる。ここでSTBは公的機関と民間企業などが連携してシンガポールを訪れる旅行者に新たな観光の可能性を生み出すためのアイデアなどを発信していくとしている。今回立ち上げるフォーラムについては第1回目の会議をシンガポールで実施するのを皮切りに今後、世界各地で実施していくことを目指す。

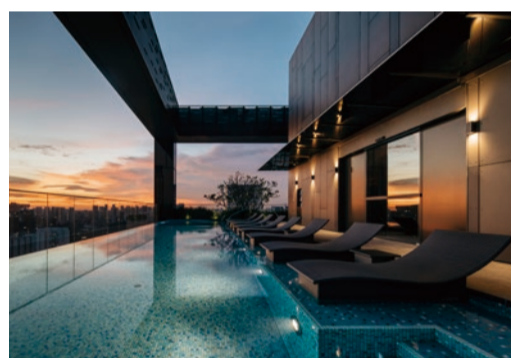
Reimagine Travel in Singaporeは、現在シンガポール国内観光需要喚起のために取り組んでいる「SingapoRediscover」キャンペーンを補完するもの。Withコロナ期において安全かつ安心な旅行スタイルを実現するために地元の観光関連企業・組織などと一体となって新たな観光素材を提案し、シンガポール国内外に発信していく。

また、ICT(情報通信技術)を駆使し、安全



国際観光復活に向けた新たなプラットフォーム「SingapoReimagine」を構築へ

面を担保しながらよりシームレスかつ効率的な観光を実現するための技術開発にも取り組む。さらに緑化や自然をテーマとしたコンテンツの開発を進め、従来以上に持続可能性を意識した活動も推進していく方針だ。



The Clan Hotel, Singapore

2021年前半オープン

伝統とモダンが出会う場所

～ Where tradition meets modernity ～

The Clan Hotelには、モダンなラグジュアリーホテルを超えた魅力があります。19世紀にシンガポールへ移住してきた中国系移民たちのインスピレーションを感じさせ、彼らが持つ固い絆や信頼、真実の姿を現代のホスピタリティーで表現しています。

Kinship (固い絆) : The Clan Hotelは、単なる滞在を超えたとおきの体験を提供します。まるでこの地に繋がっているかのような感情を起こさせるでしょう。

Trust (信頼) : ラグジュアリーな設備や国際スタンダードのサービスを超えた、かつての移民たちによってもたらされた特別なおもてなしを受けることができます。

Authenticity (真実の姿) : 同じ志を持った移民たちが経験した、この地の文化や歴史との深い繋がりを感じさせてくれます。

特別な「MASTER」シリーズの客室は、The Clan Hotelの大きな特徴です。どの客室も「The Clan Keeper」により厳選された家具や工芸品がしつらわれています。

テロックアヤにあるThe Clan Hotelは、商業の中心地や世界的に有名な観光スポットの近くに位置しています。訪れた人たちはユニークな体験ができ、より深い文化的つながりやこの地が持つ強い特徴を感じることができるでしょう。ファーイーストスクエアに面しており、ラッフルズプレイスとコリアーキーからわずか数分。ファーイーストスクエア、テロックアヤストリート、アンシャンヒル、チャイナタウンなどの歴史的な通りに囲まれています。